

本年度の指導員訪問の総括と来年度へ向けての重要点

岡崎市立上地小学校 杉浦 大作

1 訪問を振り返って

「主体的・対話的で深い学び」の実現を踏まえた多くの授業実践が行われた。子供が「運動する楽しさを味わい、自ら学びを深めていく体育学習」となるよう、どの実践も、魅力的な教材づくりや教師の出を工夫していることがうかがえた。昨年度の本部報「来年度に向けて」で述べた学習課題と環境づくりに触れながら、訪問を振り返る。

(1) 課題を見つける、解決する手がかり

A小学校のB教諭は、6年生のボール運動で自作教材の実践を行った。導入で、前時のゲーム動画や振り返りを大型モニターに映すことで、子供は視覚的に守備に課題があることに気付き、学習課題を自分事にするのできた。さらに、ゲームの記録を基にチームで失点の多かった場面を想起する時間を設け、子供が見つけた課題解決策の要点やフォーメーションの工夫を板書に整理した。子供の意見を整理したホワイトボードは、課題の解決に向けた大切な資料となった。また、常に見える位置に置かれたことで、子供はゲーム間にホワイトボード前に移動し、チームの課題を解決できる手がかりがないか探すのできた。

(2) 学習課題を意識し続ける ※チーム学習における教師の出の一例

C中学校のD教諭は、2年生のゴール型球技で自作教材の実践を行った。導入で、前日の守備場面の写真を提示し、「攻撃を防ぐために何が必要だったか」と問うことで、子供は実際の試合を想起してチームの課題を見つけ、学習課題の解決に切実感を抱くのできた。本時のタスクゲームを行う直前、教師が「今日の学習課題は何だったか」と問うたことで、子供は課題意識を高めた。そして、ゲーム間の話し合いにおいて、守備の視点からチームの動きを評価し合う姿につながった。攻撃に意識が向くチームもあったが、切実感をもてた初発問によって、子供は学習課題を思い出し、話し合いの観点を守備に修正して、主体的に学ぶ姿があった。しかし、子供だけの力では、話し合うべき課題を見失ってしまうチームもあった。教師は机間指導でチームの様子を見取り、考えを認めつつ、再度本時の課題を問うた。子供は話し合いの観点を、攻撃を防ぐ守り方に修正するとともに、次のゲームで行いたい一人一人の動きを確認し、深い学びへ向かうのできた。

2 来年度に向けて

5年生の保健の授業を参観した。E小学校のF教諭は「交通事故によるけがの防止」の実践で、通学路が載る学区の地図を用意し、身近にある危険から自分事として課題を見つけることを狙った。G小学校のH教諭は「けがの手当」の実践で、けがの種類に応じた手当を知るために、自作の蛇口と水場を用意し、応急処置について視覚的に理解できるよう狙った。これらの実践のように、子供の実態に合った教師の工夫は「深い学び」への入口となる。

I C T機器やゲームの記録の効果的な活用も、「深い学び」への入口となれる。ただ、見て終わり、書いて終わりでは、課題解決型の学習にはならない。自ら学び、教師の工夫を手がかりにして課題の解決に近づくように、子供の実態に合った教材づくりや環境づくりをしたい。

2024年4月より、小学校の保健の教科書が変わる。学ぶ内容を丁寧に読み込む機会と捉えたい。7月パリオリンピック・パラリンピック競技大会の開催により、運動・スポーツ、健康への関心の高まりが期待される。今この時を豊かなスポーツライフへの機会としていきたい。

1 訪問を振り返って

夢中で運動に取り組む子供の姿が見られる授業には、次の共通点がある。①どの子供も種目の特性に触れられるような工夫がなされている授業②自己課題の自覚を促す働きかけがなされている授業③自己課題の修正や追究方法の改善を図る場面がある授業。指導員訪問では、これらを視点に、子供が主体的に学びへ向かっているか注目して参観した。

(1) どの子供も種目の特性に触れられるような工夫

能力や経験にかかわらず、どの子供にも運動の楽しさを味わってほしいと願う。そういった教師の情熱は、教材や活動の場、また教師の出の工夫として表れる。A中学校のB教諭は、3年生の武道(剣道)で、種目に対する負のイメージを払拭してほしいと願って授業を行った。打たれる怖さを軽減するために竹刀をクッションで巻く、勢いよく面打ちできるようにするためにタイヤを積んだ練習の場を設ける、面打ちで新聞紙を裂いてその鋭さを競い合うなど、B教諭は子供の実態に応じて練習に数々の工夫を凝らした。一般的な教具や練習内容に教師が少しの変化を加えることによって、子供は剣道の特性に触れ、熱中して活動に取り組むことができた。

(2) 自己課題の自覚を促す働きかけ

「チームで作戦(または練習方法)を考えよう」と問い、数分後に主運動が始まる。チームの課題は明らかになるが、子供は個の課題を自覚しているだろうか。個が集まってチーム。個が課題を明確にもてば、チームの動きと学びは変わる。C中学校のD教諭は、1年生の球技(ベースボール型「BASEBALL 5」)で「4人で得点を決めるには、どうしたらよいか」と学習課題を設定して授業を行った。前時のゲーム映像を提示し、「なぜそこに打ったと思うか」と全体に問うD教諭。子供は映像を見返し、状況に応じた攻撃の仕方があることに気付いた。練習の際には、「この場面ではどこに打つか」「どうしてその打ち方をしたのか」と再三子供に問う。常に根拠をもった判断を促す教師の出により、子供は状況に応じた役割があることを自覚し、効率よく得点するためのプレーを見いだしていった。

(3) 自己課題の修正や追究方法の改善を図る場の設定

E小学校のF教諭は、3年生表現運動(表現「空想の世界からの題材」)の授業を行った。授業の序盤は、師範を演じて忍者の動き作りを促すF教諭。子供のノリを引き出し、即興表現が生まれてきたところで、忍者の動きを連想する言葉やイラストを掲載した「忍者カルタ」を提示した。カルタをめくると、子供にはこれまでの活動で示されなかった忍者の世界観が示される。動きの複雑化と多様化、他者と関わる表現、ストーリー性など、どのように表現しようかと新たな問いをもった子供は、更に追究意欲を加速させ、忍者の世界に没頭していった。

2 来年度に向けて

一度、教師の思考から、運動が「できる」また「できない」という「成果」の指標を切り離すべきだと考える。学びに向かう子供の様子をよく観察し、活動を支援することに重点を置きたい。プロセスを評価し、肯定的なフィードバックを繰り返す。そうすれば、子供は「成果」におびえず、運動そのものがもつ魅力へ素直に向かっていく。そして、運動やスポーツが「楽しい」と実感し、更なる運動の機会を求めて自ら動き出すはずである。だからこそ教師は、目の前の子供が各領域や種目ならではの本質に迫れているかと自らに問い、授業を省察し続ける必要がある。「成果」はおのずとついてくると子供へ穏やかに語りたいたいものである。

体育部自主研修会「がん教育」開催

2月21日(水)岡崎市総合学習センターにて開催し、59名の先生方が参加をされました。6名の養護教諭の方を講師に迎え、授業の行い方や要点についての講義がありました。質疑応答では、活発に自分の意見を伝え合い、講師の方に質問をする姿がありました。今回の資料は「FileShare → ルート → 現職研修部フォルダ → 09 体育部 → がん教育資料集」に格納しています。ご活用ください。

